

詩篇109－113篇 「尋ね求められる御業」

1A 敵への呪い 109

1B 愛に対する邪悪な口 1－5

2B 呪うことへの報い 6－20

3B 見せしめのための祝福 21－31

2A 永遠の祭司 110

1B 天における御座 1－4

2B 地上における戦い 5－7

3A 心を尽くした感謝 111

1B 尋ね求められる御業 1－3

2B 御民への契約 4－10

4A 主を恐れる者の幸い 112

1B 堅く立つ義 1－6

2B 敵を恐れる心 7－10

5A 身を低くされる神 113

1B 高く上げられる御名 1－4

2B 貧しい人を引き上げる方 5－9

本文

1A 敵への呪い 109

詩篇 109 篇を開いてください。109 篇をお読みになったことは、かなり戸惑ったのではないかと思います。詩篇にはいくつかある、「呪いの詩篇」と呼ばれるものです。愛に対して悪で報いる者たちに対して、基本的にその者が呪われるようにと祈っている類いのものです。敵に裁きを行ってくださいと願っているように聞こえます。けれども、それはイエス様の願われた祈りのように思えません。「敵を愛し、敵を祝福しなさい。」と主は命じられ、十字架上でも、「父よ、彼らを赦してください。彼らは何をしているのか、分からないのです。」と祈られました。

けれども、実はイエス様ご自身が、呪いの詩篇と同じような言葉をもって裁きを宣言した箇所は、いくつかあるのです。「それから、イエスは、数々の力あるわざの行なわれた町々が悔い改めなかったので、責め始められた。「マタイ 11:20-22 それから、イエスは、数々の力あるわざの行なわれた町々が悔い改めなかったので、責め始められた。「ああコラジン。ああベツサイダ。おまえたちのうちで行なわれた力あるわざが、もしもツロとシドンで行なわれたのだったら、彼らはどうの昔に荒布をまとい、灰をかぶって悔い改めていたことだろう。しかし、そのツロとシドンのほうが、おまえたちに言うが、さばきの日には、まだおまえたちよりは罰が軽いのだ。」そして、律法学者とパリサイ人にも呪いを宣言されました。「忌まわしいものよ」と八回、宣言されて、その後で呪いを述べてい

ます。そして最後に、「見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。(マタイ 23:38)」と言われました。

神は情け深く、憐れみに満ちておられます。それゆえ、ご自分の御子に十字架によって御怒りを置いてくださり、私たちが罪の罰から救われるようにしてくださいました。これだけの大きな犠牲をもって神は私たちを愛してくださいました。しかし、その愛を軽視して、それでも罪の中に留まるのであればどうなるのでしょうか？神の示された究極の愛を拒むのであればどうなるのでしょうか？残りは、容赦ない裁きしかないのです。「ヘブル 10:26-27 もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。」ですから、神は赦しに富んだ方ですが、それは罪を許容しているということでは決していないことを知る必要があります。神は聖なる方であり、罪から一切隔絶している方です。

ですから、神の与えられた罪の赦しを拒む者たちに対する、呪いの宣言をダビデが、聖霊によって代表して語っているのが、この詩篇であります。そして実は、この詩篇はイスカリオテのユダについての預言も含まれます。キリストの示された愛を拒んでいった世代に対する、神の怒りの現われがここでは預言されています。

1B 愛に対する邪悪な口 1-5

109 指揮者のために。ダビデの賛歌 109:1 私の賛美する神よ。黙っていないでください。109:2 彼らは邪悪な口と、欺きの口を、私に向けて開き、偽りの舌をもって、私に語ったからです。109:3 彼らはまた、憎しみのことばで私を取り囲み、ゆえもなく私と戦いました。109:4 彼らは、私の愛への報いとして私をなじります。私は祈るばかりです。109:5 彼らは、善にかえて悪を、私の愛にかえて憎しみを、私に報いました。

キリストの示された愛に応答せず、むしろ邪悪な口と、欺きの口を向けている状況を示しています。キリストの愛は、頑強な愛です。罪人を愛して、罪人が悔い改めることのできるようにする愛です。骨折したのであれば、絆創膏を与える愛ではなく、その折れた骨にまで手を持っていき、治療して皮膚を閉じるような、根本治療をされる愛です。しかし、パリサイ派や律法学者のように、罪を罪としない自己義認があれば、そのような愛は憎まれます。

2B 呪うことへの報い 6-20

109:6 どうか、悪者を彼に遣わしてください。なじる者が彼の右に立つようにしてください。109:7 彼がさばかれるとき、彼は罪ある者とされ、その祈りが罪となりますように。109:8 彼の日はわずかとなり、彼の仕事は他人が取り、109:9 その子らはみなしごとなり、彼の妻はやもめとなりますように。109:10 彼の子らは、さまよい歩いて、物ごいをしますように。その荒れ果てた家から離れて、物ごいをしますように。

ここから呪いを祈っています。自分を弁護し、救い出してくれる存在を「右に立つ者」として表現するのですが、救う人ではなく、悪者、なじる者を彼の横においてください、と言っています。自分のしていることを、そのまま彼に報いてくださいと言っているのです。そして、8 節の言葉が、イスカリオテのユダに対するものです。使徒ペテロが、イエス様が昇天された後に、弟子たちに対して、ユダに代わる使徒を選ぼうと提言した時に、この詩篇の箇所を引用しました(使徒 1:20)。

109:11 債権者が、彼のすべての持ち物を没収し、見知らぬ者が、その勤労の実をかすめますように。109:12 彼には恵みを注ぐ者もなく、そのみなしごをあわれむ者もいませんように。109:13 その子孫は断ち切れ、次の世代には彼らの名が消し去られますように。109:14 彼の父たちの咎が、主に覚えられ、その母の罪が消し去られませんかように。109:15 それらがいつも主の御前にあり、主が彼らの記憶を地から消されますように。109:16 それは、彼が愛のわざを行なうことに心を留めず、むしろ、悩む者、貧しい人、心ひしがれた者を追いつめ、殺そうとしたからです。

少し昔の日本を思い起こしていただければ良いのですが、かつての社会は族長のそれでした。個人は、その家と密接に結びついていました。ヨシュアが、「わたしと、わたしの家とは主に従う。」と言って、「わたしは、主に従う。」と言いませんでした。ですから、呪いが彼本人だけでなく、彼の家族や財産にも、全てに及びます。私たちは、アダムを頭とする家にいるのか、それともキリストを頭とする神の家にいるのかによって、全てが変わります。キリストを頭としていれば、神の家の中で守られます。罪を犯したアダムを頭としていれば、罪と死の法則の中に入れられたままです。

そして、これらの呪いの根拠が、「悩む者、貧しい人、心ひしがれた者を追いつめ、殺そうとした」とあります。これは、イエス様の言われた「この小さき者のたちのひとりに、つまずきを与えるようであったら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。(ルカ 17:2)」という言葉と同じです。悩む者、貧しい人というのは、単に経済的なことではなく、むしろ「心の貧しい者は幸いである」という、もっと霊的な貧しさです。神なしには決して生きていけない、自分には何もないと強烈に感じ取っている人々のことです。そうした人々の弱さに付け込んで、追いつめ、殺していくのであれば呪いがあります。事実、キリストは私たちの罪のゆえに、弱くされました。そのキリストをその弱さのゆえに軽んじるのであれば、その人は呪いを受けるのです。

109:17 彼はまたのろうことを愛したので、それが自分に返って来ました。祝福することを喜ばなかったで、それは彼から遠く離れました。109:18 彼はおのれの衣のようにのろいを身にまといました。それは水のように彼の内臓へ、油のように、その骨々にしみ込みました。109:19 それが彼の着る着物となり、いつも、締めている帯となりますように。109:20 このことが、私をなじる者や私のたましいについて悪口を言う者への、主からの刑罰でありますように。

これは、「裁く者は、その裁きによって裁かれる。」という原則です。この世には、「憐れむ者は幸いです。その人は憐れみを受けるからです。」という憐れみの世界と、裁く者は裁かれるという裁き

の世界の二つしかありません。人を裁き、人を憎しみ、人を呪うのであれば、自分自身が裁かれ、憎まれ、呪われる中で生きるしかありません。神の愛と赦しに留まり、愛と赦し、憐れみの中に留まれば、互いに愛し、また神の憐れみを受ける中に住んでいることができます。

3B 見せしめのための祝福 21-31

109:21 しかし、私の主、神よ。どうかあなたは、御名のために私に優しくしてください。あなたの恵みは、まことに深いのですから、私を救い出してください。109:22 私は悩み、そして貧しく、私の心は、私のうちで傷ついています。109:23 私は、伸びていく夕日の影のように去り行き、いなごのように振り払われます。109:24 私のひざは、断食のためによろけ、私の肉は脂肪がなく、やせ衰えています。109:25 私はまた、彼らのそしりとなり、彼らは私を見て、その頭を振ります。

詩篇の中にある呪いの言葉をよく読むと、ここにあるように、思いの中にある戦いのためであることが良く分かります。ダビデは、主によって愛され、そして主を愛し、隣人を愛していく中で、その愛の関係に付け込んで悪口を言い、罵る者がいるのであれば、それらを取り除いてくださいと必死に祈ります。主との関係の中に、その関係を壊すような要素が入ってくる時に、主がそれを裁いてくださいますようにという、強い情熱的な思いを言い表す時に使われることが多いです。使徒パウロもそのような祈りを捧げました。「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください。(マラナ・タ)」と祈りました(1コリント 16:22)。ですから、ここでも敵への呪いを祈った後で、それですべてのことを主に任せて、主ご自身と自分との関係が守られるように祈っているのです。

109:26 わが神、主よ。私を助けてください。あなたの恵みによって、私を救ってください。109:27 こうして、これがあなたの手であること、主よ、あなたがそれをなされたことを彼らが知りますように。109:28 彼らはのろいましょう。しかし、あなたは祝福してください。彼らは立ち上がると、恥を見ます。しかしあなたのしもべは喜びます。109:29 私をなじる者が侮辱をこうむり、おのれの恥を上着として着ますように。109:30 私は、この口をもって、大いに主に感謝します。私は多くの人々の真中で、賛美します。

ダビデの願った復讐方法は、自分が神の恵みによって救われる姿を見せることです。主が彼を祝福されることを敵が見れば、敵はそれを見て恥じ入ります。悪に対して悪で報いるのではなく、善をもって報いるのです。それが、信仰者としての復讐の方法です。悪者にも、「これは、主なる神が行なっているものと思えない。」と悟ることのできるころまで、しっかりと主のうちに立って、後退しないことです。もちろん、ここでその人が悔い改めればよいのですが、ここではそうした祝福の証しを見ても悔い改めないのも、それは侮辱となり、恥を被るということになります。

109:31 主は貧しい者の右に立ち、死刑を宣告する者たちから、彼を救われるからです。

先に、「なじる者が彼の右に立ちますように」と祈りましたが、ここでは主ご自身が、貧しくなって

いる自分の右に立ちますように、と祈っています。そして、これは十字架につけられた、キリストの預言です。イエス様の横には、十字架刑にする権威を持っているローマ総督ピラトが立っていますが、父なる神ご自身がそこに立ってくださいますように、という祈りであります。そして、「十字架につけろ。十字架につけろ。」と叫ぶ者たちから、救われるようにと祈っています。

そして、この祈りは聞かれました。十字架を免れたのではなく、十字架刑で死んでも、墓に留まっていなかったということによって、祈りが聞かれたのです。この方が何ら罪のない方であること、正しい方であることが復活によって公に認められたのです。したがって、私たちもキリストの復活によって、義と認められます。「ローマ 4:25 主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」

2A 永遠の祭司 110

そして 110 篇は、109 篇の続きです。キリストがよみがえられ、そして昇天され、神の右の座に着かれるところの預言、メシヤ詩篇であります。

1B 天における御座 1-4

110 ダビデの賛歌 110:1 主は、私の主に仰せられる。「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。」

イエス様は、復活によって確かに、この方が神の御子であることが公にされました。しかし、その御子の力と権威の現われは将来を待たなければいけません。「わたしの右の座に着いていよ。」というのは、王子としてすでに即位している状態です。けれども、「足台」とするというのは、相手を完全に屈服させ、制圧し、完全に従属させることです。ヨシュアが、五人のカナン人の王を倒して、そして戦士たちに、その王の首に足をかけるように言いつけました(ヨシュア 10:24)。そしてキリストの預言である創世記 3 章 15 節の言葉は、「彼は、おまえの頭を踏み砕き」とあります。これも、同じ考えで、敵を足台とすることです。

ですから今、神の右の座に着いておられるのですが、けれどもまだ敵を自分の足台にしていないということです。キリストが勝利を収められましたが、すべての物がキリストの支配下にまだ入っていない状態です。けれども霊的な勝利は約束されています。

110:2 主は、あなたの力強い杖をシオンから伸ばされる。「あなたの敵の真中で治めよ。」110:3 あなたの民は、あなたの戦いの日に、聖なる飾り物を着けて、夜明け前から喜んで仕える。あなたの若者は、あなたにとっては、朝露のようだ。

これは、キリストがまだ戻って来られていない時の状態、すなわち今の状態です。キリストの御国は地上では立てられていません。敵がシオンの周りにたくさんいます。けれども、「治めよ」と命

じておられます。つまり、物理的には敵が大勢いるのですが、目で見えない形で霊的には治めておられるのです。敵が包囲していることが、全く妨げにならず、むしろ圧倒的に勝利していることができるのです。

これが私たちの今の時代における、霊の戦いの姿です。使徒ヨハネは、「私たちは神からの者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。(1ヨハネ 5:19)」と言いました。私たちにいま、敵がいなくなるという約束は与えられていません。むしろこの世の神である敵が全世界を支配しているのです。けれども、御子がそれでも支配しておられる、敵さえもご自身の中に入れておられます。私たちが、いつもこの幻を携えて、霊の戦いに臨むべきですね。そして、そのことを知っている聖徒たちは、聖なる飾り物を付けて喜んで仕えています。そこには若者の姿もいます。力を持ち、朝露のような存在です。これも、私たちの姿です。霊の戦いにおいて、私たちは聖なるキリストを身に着け、そして主に喜んでお仕えます。戦いは主のものであり、すでに勝利を約束しておられるのです。

110:4 主は誓い、そしてみこころを変えない。「あなたは、メルキゼデクの例にならぬ、とこしえに祭司である。」

王子として即位しておられる方は、同時に祭司ともなっておられます。午前礼拝で見たように、キリストが祭司として執り成しをしてくださるので、ローマ 8 章にあるように、どんな困難の中にあっても、「圧倒的な勝利者」となることができます。もう既に十字架の上で神がキリストによって行ってくださったことを、キリストの執り成しによって私たちに当てはめ、強めてくださるのです。

2B 地上における戦い 5-7

110:5 あなたの右にいます主は御怒りの日に、王たちを打ち砕かれる。110:6 主は国々の間をさばき、それらをしかばねで満たし、広い国を治めるかしらを打ち砕かれる。110:7 主は道のほとりの流れから水を飲まれよう。それゆえ、その頭を高く上げられる。

これは主がその右の座から立ち上がり、そして事実、敵をご自分の足台としてくださることです。ハルマゲドンの戦いにおいて、その反抗する軍隊をご自分の口から出る剣で殺されます。そしてその地域一帯は屍で満たされます。そして、広い国を治めるかしらとは反キリストのことです。頭を砕かれます。そして、「主は道のほとりの流れから水を飲まれよう。」というのは、勝利して、ようやく息をついて、戦い休みを得ることができ、ほっとしている姿であります。ゼカリヤ書 6 章 8 節には、国々に対する戦いを終えた後に、「わたしの霊を休ませる」という表現があります(新改訳引照部分参照)。

3A 心を尽くした感謝 111

こうした私たちは、キリストご自身の御業を見ることができました。そして、次の第百十一篇はこう

した神の偉大な御業を尋ね求める姿を読むことができます。

1B 尋ね求められる御業 1-3

111:1 ハレルヤ。私は心を尽くして主に感謝しよう。直ぐな人のつどいと集会において。111:2 主のみわざは偉大で、みわざを喜ぶすべての人々に尋ね求められる。111:3 そのみわざは尊厳と威光。その義は永遠に堅く立つ。

詩篇 111 篇、112 篇、そして 113 篇は「ハレルヤ」という言葉から始めています。神をほめたたえる、という意味です。そして、「心を尽くして主に感謝しよう。」と語っています。感謝するということは、何となく漫然とした態度では、できないものです。そうではなく、心を込めて、意志を合わせて、献身することによってできることでもあります。そして、主の恵みによって支えられている霊を保っているからこそ、そこから感謝と喜びが溢れます。さらに、「直ぐな人のつどいと集会において。」とあります。次の 112 篇も直ぐな人について書かれています。これは二心でないこと、神を愛し、そして世を愛することはできません。世を愛するのであれば、世の敵になります。

そして、「主のみわざは…尋ね求められる。」と続きます。ここの「尋ね求める」という言葉は、英語で“study”となっており、注意深く見ていき、探究するという意味合いになっています。109 篇と 110 篇を読んで、それがキリストの御業であることを見ました。主の御業を尋ね求める、その御業の探究していくこと、それが喜びになっているかどうか、私たちに問われます。ある統計では、アメリカでの無神論者は、職業別に見ると、心理学者、精神学者、社会学者に多いそうです。なぜか？神ではなく、墮落した人の姿を対象研究としているためです。私たちの信仰は、徹底的な神中心主義です。神の御業を喜びます。けれども、「神がどのような方なのか」「キリストの御業」このようなものを中心に扱った本は、キリスト教書店でも片隅においやられ、むしろ人間関係について、人間の心理について、社会問題について注目が行きます。これは、心が神の御業を尋ね求めるのではなく、人の業を尋ね求めている結果なのです。

そして 3 節、キリストの御業は尊厳と威光に満ちています。そして、それは永遠の義であります。神ご自身が義であり、キリストが行われたことも永遠に続く義であります。

2B 御民への契約 4-10

111:4 主は、その奇しいわざを記念とされた。主は情け深く、あわれみ深く、111:5 主を恐れる者に食べ物を与え、その契約をとこしえに覚えておられる。111:6 異邦の民のゆずりの地を、ご自分の民に与え、彼らに、そのみわざの力を告げ知らせられた。111:7 御手のわざは真実、公正、そのすべての戒めは確かである。111:8 それらは世々限りなく保たれ、まことと正しさをもって行なわれる。111:9 主は、御民に贖いを送り、ご自分の契約をとこしえに定められた。主の御名は聖であり、おそれおおい。

奇しい業を記念、思い出しています。一つはそのご性質です。情け深く、憐れみ深い方です。主がモーセのご自分の名を宣言された時に、情け深く、憐れみに富み、怒るに遅いと宣言されました。そして、契約を永久に覚えておられるとありますが、アブラハムに対する契約があります。それがどんな月日が経とうとも、覚えておられます。その結果、彼らにカナンを相続としてお与えになりました。そして、贖いを御民に送ったとありますが、これは出エジプトであり、それに伴いシナイにおいても契約を定められました。このように、主は契約を結んでくださった方です。

ここで、「御手のわざは真実、公正、そのすべての戒めは」とあります。私たちには、自分の理解では分からないことが、神の御業の中にあります。例えば、なぜ自然災害を起こすのか、ことさらに悪いことをしていない人なのに、なぜ重罪人であるかのような仕打ちを受けたのか。私たちには分かりません。そして、戒めも分からない時があります。なぜ偶像がいけないのか？なぜ、私たちの神がそんなに他の神々に妬みを持っておられるのか？なぜ男女の婚姻によってのみ性交渉が認められていないのか、別に構わないではないか、など、心に思い上がることは尽きません。けれども、私たちは主を信頼しているのです。主は必ず、私たちが確かに御手の業は真実で公正であることを、天において知ることになるでしょう。確かにその戒めは確かなものであり、あらゆる災いから私を守るものであったことを知ることでしょう。黙示録では、天において何度となく、「神のさばきは真実で、正しいからである。(19:2)」と賛美されています。

111:10 主を恐れることは、知恵の初め。これを行なう人はみな、良い明察を得る。主の誉れは永遠に堅く立つ。

これは、まとめです。自分の悟りではなく、主の御業と戒めに心を留め、それを行なうことこそが知恵深いのです。私たちには、時に愚かに見えたとしても、それを行なうと良い明察を得るのです。人を恐れるのではなく、主を恐れる、これが良い道であります。

4A 主を恐れる者の幸い 112

そこで 112 篇です。これは 111 篇の続きです。神の御業を尋ね求めることが、主を恐れることであれば、次はその主を恐れる者がどのような祝福を受けるかについて、具体的に書かれています。

1B 堅く立つ義 1-6

112:1 ハレルヤ。幸いなことよ。主を恐れ、その仰せを大いに喜ぶ人は。112:2 その人の子孫は地上で力ある者となり、直ぐな人たちの世代は祝福されよう。112:3 繁栄と富とはその家にあり、彼の義は永遠に堅く立つ。

これは、神を恐れるすべての人に与えられる約束ではなく、アブラハムへの約束、そしてモーセを通してイスラエルに対して与えられた約束です。このような箇所を取り上げて、あなたはキリストに従えば繁栄し、富んだものとなるという「繁栄神学」というものが、偽りの教えとして教会の中に

あります。いいえキリスト者には、新しい契約にある約束があります。そこには、この世の富で満たされるという約束はありません。しかし、後に来る世においてはあります。神の国を受け継ぐようになるからです。ここに書いてある通りキリストにあつて富んだ者、繁栄した者になります。

そして大事なものは、「彼の義は永遠に堅く立つ」という部分です。111 篇では、神の義が永遠に立つことが書いてありました。けれども、ここでは主を恐れる者の義が堅く立ちます。ここは、信仰によって得られる義です。アブラハムが神を信じて、その信仰が義と認められたように、その義が永遠に続きます。信仰の報いとして、永遠の義とその報いが与えられるのです。ところで、私たちはとかく、目の前にある報いに目を留めます。したがって、今、報われていないようなことに疲れを覚え、あきらめてしまいます。しかし、一時的な報いと、永遠の報いの違いは、ちょうど花火の光の輝きと夜空の星に例えることができるでしょう。瞬時に明るくなる花火は華々しいものです。誰もその時に、夜空の星の輝きを見ません。しかし、それは一夜にして、一時間、二時間で終わり、その明るさがなくなった後に、なおのこと星の輝きがあるのです。

112:4 主は直ぐな人たちのために、光をやみの中に輝かす。主は情け深く、あわれみ深く、正しくあられる。112:5 しあわせなことよ。情け深く、人には貸し、自分のことを公正に取り行なう人は。112:6 彼は決してゆるがされない。正しい者はとこしえに覚えられる。

111 篇に、主は情け深く、憐れみ深いとありましたが、ここでは主を恐れる人が他の人々に情け深く、人に貸すということを行なっていると幸いであるとあります。主の愛に満たされた者は、人に対してその愛を分かち合っていくことによって、さらに神の愛の深みに入ることができます。そして、「自分のことを公正に取り行なう」ことって難しいですね。自分には憐れみ深くても、他者にはそのように寛容になれないという不公正があります。ですから使徒パウロは、「もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。(1コリント 11:31)」と言いました。

2B 敵を恐れる心 7-10

そして、「決してゆるがされない」という約束もありますが、この地上で生きている課程で、悪いことはどんどん起こります。けれども、主が彼を覚えておられるので、その悪いことから守られる様子を次に書いています。

112:7 その人は悪い知らせを恐れず、主に信頼して、その心はゆるがない。112:8 その心は堅固で、恐れることなく、自分の敵をものともしないまでになる。112:9 彼は貧しい人々に惜しみなく分け与えた。彼の義は永遠に堅く立つ。その角は栄光のうちに高く上げられる。112:10 悪者はそれを見ていられ、歯ぎしりして溶け去る。悪者の願いは滅びうせる。

私たちの周りには、悪い知らせが数多くあります。そして、その知らせによって不安になり、その不安が自分を突き動かしているような状況です。しかし、主を恐れる者にはそれを恐れることはあ

りません。なぜか？主に信頼しているから、またその心が堅く主に向かっているからです。そして悪意や罪が自分の周りにあっても、自分のすべきこと、主から任されたことをしっかりと行っています。「貧しい人々に惜しみなく分け与えた」ということは、霊的にもそうですし、自分の財産も分け与えるという物理面でもそうでしょう。霊的には、福音の中に人々が生きることができるように惜しみなく捧げることであり、それに付随して財産も分け与えます。すると、その義はしっかりと永遠に堅く立ち、栄光に満ちたものになります。「ダニエル 12:3 思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」ですから、しっかりと堅く立っていることが必要です。「1コリント 15:58 ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」

そして最後に、悪者は苛立ち、歯切りして溶け去る、とあります。願いも滅び失せます。私たちはどうしても、悪意に対して悪で対抗したくなります。しかし、109 篇でも学びましたように、主のわざをしっかりと行っていくことが、悪意を滅ぼす尤も有効な武器なのです。

5A 身を低くされる神 113

詩篇 113 篇から、新しい区分になります。113 篇から 118 篇までは「ハレル詩篇」と呼ばれます。ハレル詩篇は、ユダヤ人の祭り、過越の祭り、五旬節、仮庵の祭りで歌われるものです。ですから、イエス様が最後の晩餐の時に詩篇を歌われましたが、113 篇から 118 篇までの歌を歌っていたことが分かります。118 篇は、あの「ホサナ」という言葉が出てくる詩篇であり、しかしそこには、「家を建てる者たちに見捨てられた石が、要石となった」という十字架の預言も出てくる言葉になっており、私たちが受難週と復活祭を迎えるにあたって、非常に相応しい詩篇になっていきます。今日は、113 篇だけ読んで、残りは来週に譲ります。

113:1 ハレルヤ。主のしもべたちよ。ほめたたえよ。主の御名をほめたたえよ。113:2 今よりとこしえまで、主の御名はほめられよ。113:3 日の上る所から沈む所まで、主の御名がほめたたえられるように。113:4 主はすべての国々の上に高くいまし、その栄光は天の上にある。

113 篇から 118 篇までは、このように、主がいかに優れた方なのか、その至上性が歌われています。主の御名が永遠に至るものであること、また日の上る所からその沈むところまでというように、広がりを持っていること。そして、高いのは国々の上に至り、天の上にあること。私たちは、世界よりも大きい、この宇宙よりも大きい神に仕えているのです。

2B 貧しい人を引き上げる方 5-9

けれども、その高き所におられる方が、低いところまで来てくださったというのが 113 篇の中心テーマです。

113:5 だれが、われらの神、主のようであろうか。主は高い御位に座し、113:6 身を低くして天と地をご覧になる。

「身を低くして天と地をご覧になる」という表現がいいですね。主は、イスラエルの民に対してこれを行って下さいました。エジプトで奴隷状態であった民のところまで降りてこられて、その状況を見て、その叫びを聞いておられました。彼らをそこから救い出し、そして律法を与えられましたが、実に地上で起こっている細かいところにまで、戒めを与えられました。主が、私たち一人一人の小さなことにまで気をかけてくださっていることを知ることができます。

そして何よりも、このことはクリスマス、キリストのご降誕によって成就しました。ことばが肉となり、私たちの間に住まわれたという受肉によって実現しました。いと高き方が、羊飼いにによって礼拝を受ける赤ん坊となってくださったのです。

113:7 主は、弱い者をちりから起こし、貧しい人をあくたから引き上げ、113:8 彼らを、君主たちとともに、御民の君主たちとともに、王座に着かせられる。113:9 主は子を産まない女を、子をもって喜ぶ母として家に住ませる。ハレルヤ。

主は、ご自分が貧しくなられることによって、弱くされることによって、主の内にあるものを富ませ、強めることを行って下さいました。「2コリント 8:9 あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」私たちは、物理的には貧しさを身にまとも、神の国の相続者としての富を得ることができます。そして将来、来るべき御国において、キリストと共に王座に着く者として下さいます。ですから、主に従う道は、自分が低くされて、低くされるからこそそこに高くされる報いがあるという希望に満ちた道であります。

そして女にとっては、子を産まないということが一種の貧しさを表していました。子孫によって神は祝福して下さるのに、子を産まないのですから。けれども、イスラエルの歴史はサラ、リベカ、ラケルは初め、不妊の女でありました。そしてサムエルを産んだハンナも不妊であり、またパプテスマのヨハネの母エリサベツもずっと不妊でした。そうした女たちに神は目を留めてくださり、かえって子を産んでいる女たちよりも子を持つ女としての栄誉を与えて下さいます。

このような逆転劇が、神の国の訪れです。私たちがいつも、この逆転劇の中に生かされているものとして、自分を高くしたいのであればへりくだることを喜び、富みたければ、自らを空しくする、あるいは貧しくすることを喜び、その中でキリストの富、キリストの栄誉を喜んでいるような生活をしていきたいですね。